



Title	いわゆる第3のドグマと自然化された認識論
Author(s)	麻生, 尚志; Aso, Takashi
Description	
Citation	哲学, 37, 1-20
Issue Date	2001-07-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48010
Type	departmental bulletin paper
File Information	37_1-20.pdf



いわゆる第3のドグマと 自然化された認識論

麻生 尚志

クワインによる経験主義批判を拡張する形で、デイヴィッドソンは「概念図式という考えそのものについて⁽¹⁾」という論文において、図式／内容の二元論が経験主義の第3のドグマであると指摘し、その第3のドグマを取り払った後にはもはや経験主義と呼ぶべきものは残されないとの議論を行った。それに対しクワインは、デイヴィッドソンへの返答「いわゆる第三のドグマについて⁽²⁾」ならびにその他の論文において、経験主義そのものを放棄することはせず、認識論の自然化を軸としつつあくまで経験主義と呼ぶべきものを維持していった。

この小論において私は、両者の議論を比較したうえで、クワインにおける経験主義と自然化された認識論との間の連関を明らかにしたい。

1. 概念相対主義

概念図式（conceptual scheme）とは、経験を整頓する（organize）方法、感覚データに形式を与える範疇の体系といったものとデイヴィッドソンは捉え⁽³⁾、概念図式という考えには、統合されるものとしての感覚的データや経験と、統合するものとしての形式や体系、という内容と図式の二元論があると指摘する⁽⁴⁾。「概念図式という考えそのものについて」においてデイヴィッドソンは、分析／総合の二分法と還元主義という二つのドグマを除去して後も、経験主義にはこの図式／内容の二元論という第三のドグマが残されており、この三つめのドグマ

もまた取り除かれねばならないが、この第三のドグマを退けた後にはそもそも経験主義と呼ぶものが残されているか疑問であり、経験主義そのものが廃棄されるべきことを主張した⁽⁵⁾。

意味論における真理論の重要な役割を明らかにしたことで知られるデイヴィッドソンのその論文での目的は、概念相対主義を批判し客観的な真理を擁護することにあつた⁽⁶⁾。

概念相対主義とは、真理はそれの属している概念図式にたいして相対的であると主張するもので、極端な形態においてはクーンらのパラダイム論に見られるように、それぞれの概念図式における真理はその図式においてのみ有効であり、異なる図式同士は互いに共約不可能であるということが主張される⁽⁷⁾。それによれば実在 (real) それ自身も図式に対して相対的であり、一つの体系において実在的であっても別の体系においては実在的でないかもしれないことが主張される⁽⁸⁾。その含意するところは客観的な真理の否定である。

だが、そうした概念相対主義にはパラドクスがあるとデイヴィッドソンは指摘する。そのパラドクスとは次のようなものである。複数の互いに共約不可能な概念図式があるとした場合、それらが互いに異なるものであると判定するための共通の座標軸がなければならぬのではないか。けれどもそうした共通の座標軸の存在は互いに異なる概念図式同士の共約不可能性の主張を裏切りはしないか。⁽⁹⁾

この問題を検討するにあたって、そもそも概念図式とは何であるかが明確にされねばならないだろう。まず概念図式は言語と同一視できるのだろうか。すなわち同じ言語を用いていれば同じ概念図式を共有しており、また概念図式が異なれば異なる言語を用いていると看做することができるのだろうか。概念図式と言語を単純に同一視するよりも、次のように考えた方が妥当であろう。たとえ用いている言語が異なってもそれらが互いに翻訳することができるのならば概念図式を共有することはできる、というように。ならば翻訳可能性という基準を調べるのが概念図式の同一性についての基準を得る一つの方法となろう。少なくとも、言語と概念図式は単純に同一視はできないが、互いに密接に結びついている

ものと看做して差し支えない⁽¹⁰⁾。デイヴィッドソンはこうした予備的考察の後、さらに議論を進める。

2. 翻訳可能性の完全な失敗と部分的失敗

翻訳可能性を軸に概念相対主義を考察してみよう。その際次の二つに場合分けが可能である。一つは翻訳可能性の完全な失敗 (complete failure of translatability) であり、もう一つは翻訳可能性の部分的な失敗 (partial failure of translatability) である。ある言語中の有意味な範囲にあるどの文も他の言語に翻訳できない場合が前者であり、翻訳できる範囲はあるが翻訳できない範囲もある場合が後者である。⁽¹¹⁾

デイヴィッドソンは、前者について次のような根本的な疑問を呈する。そもそも我々の言語に少したりとも翻訳できないような言語を想定した場合、それが言語であるとどのようにして知ることができるのか。我々の言語においてまったく解釈できないような発話行動は言語ではないと主張することもできよう⁽¹²⁾。その場合には翻訳可能性の完全な失敗はそもそもありえないことになる。

翻訳可能性の完全な失敗がありうると主張するためには、言語性の別の基準が必要になるだろう⁽¹³⁾。ではその基準はどこに求めることができるだろうか。

デイヴィッドソンは、ある人の態度を記述できることとその人の言語を翻訳できることとの間の密接な関係に注目する。発話が有意味な発話であるためには、細かく区別された意図や信念といったものが必要となろう。一方、信念や意図などの態度がある話者に帰属させるためにはその話者の発話を解釈できる必要がある⁽¹⁴⁾。故に翻訳可能性の完全な失敗を主張することは、一方である話者の発話を発話であると理解している、すなわちその発話を何らかの仕方でも解釈しながら、他方その話者の発話の一切は解釈できないと主張していることになってしまう。

よって我々の言語に全く翻訳不可能でありながらなおかつ言語であるような言語が存在するという主張そのものが疑わしいもののように思われる。ではそうし

た主張はどのような背景から為されているのであろうか。

3. 分析／総合の二元論と図式／内容の二元論

概念相対主義者のいう共約不可能性とはどのようなことか理解するために、デイヴィッドソンは世界という言葉を用いた次のふたつの比喩を検討する。一つはストローソンの「我々の知っている世界と全く異なる世界を想像することは可能である」。もう一つは、異なるパラダイムに属する科学者は「異なった世界で仕事をしているのだ」というクーンの表現である⁽¹⁵⁾。デイヴィッドソンは前者の比喩には一つの言語内での分析／総合の二元論が、後者の比喩には全体の図式もしくは言語と解釈されてない内容という二元論があると指摘する⁽¹⁶⁾。前者の二元論はすでにクワインが「経験主義のふたつのドグマ」において批判したもののだが、デイヴィッドソンの指摘する後者の二元論はどのようなものであるのか。

まずデイヴィッドソンは分析／総合の区別を、一つの言語内での概念 (concept) と内容 (content) の区別として捉え直す⁽¹⁷⁾。分析的真理とは概念によって真であり、総合的真理とは内容すなわち世界のあり方に依存して真であると言い換えることができる。すると分析／総合の二元論を破棄することは、経験的内容を伴った理論と、経験的内容とは対比される言語との間に明瞭な区別を引きえないということになる。経験的内容に基づいている総合的真理と経験的内容を持たず言語的要因にのみ基づいている分析的真理との二分法を破棄した場合、すべては分析的真理であるとするのかもしくはすべては総合的真理であるとするのかどちらかを選ばざるをえない。いやしくも経験主義者であれば、分析的真理を破棄し、総合的真理およびそれを支えている経験的内容という考え方を保持することとなろう。けれどもそのようにして総合的真理を保持し拡張するのならば、全体的体系としての概念図式と、それに対置される経験的内容という二元論が残されていることは明らかである。

この二分法こそは全体の図式と未解釈の内容という二元論である。この二元論

が概念相対主義の背後にあり、それは分析／総合の二元論と同じく経験主義のドグマであるとデイヴィッドソンは指摘する⁽¹⁹⁾。なぜこれが概念相対主義に潜む二元論であり、経験主義の擁護できないドグマであるのか。

概念図式が異なると言えるためには、互いに翻訳不可能でありながら、かつ両者が異なったものであることを判定するための共通の座標軸が存在しなければならない—これが概念相対主義のそもそものパラドクスであり、そうしたパラドクスに陥らず翻訳可能性の完全な失敗を理解できるのかというのが我々の当座の問題である。概念相対主義者はそのパラドクスを言語と経験的内容、すなわち概念図式と解釈されていない生のままの内容という二元論を用いることで回避しているというのがデイヴィッドソンの指摘である。

デイヴィッドソンは、概念相対主義は次の三つの側面から成り立っていると整理する。第一に、コミュニケーションの手段もしくは経験を予測する手段として用いられかつ理論と切り離し得ない言語。第二に、その言語と対置される、言語とは独立した経験。第三に、互いに全く異質な言語であることの判定基準となる翻訳不可能性。我々は概念相対主義を支える翻訳不可能性についての考察を進める内、翻訳不可能性の成立する前提となる前者二つの論点に難があることに気づかされた。すなわち概念図式の共約不可能性は翻訳可能性の失敗として理解できるが、「別の世界」と言い切るほどに徹底した概念相対主義を主張できるための論拠となる翻訳可能性の完全な失敗を意味あるものとするには、理論と切り離し得ない言語とその言語から独立した経験という二元論が必要となる。すなわち、なるほど概念図式の全く異なる言語同士を比較するような座標軸としてどちらかの言語もしくは別の言語を持ち出すならば翻訳不可能性という前提に抵触するが、理論的枠組みを与えられる以前からあり言語からは独立している経験を比較のための共通した座標軸としてとるならばなんら矛盾は生じない。概念相対主義者は暗黙の内にこの概念図式と経験的内容という二元論を論拠としていることを、デイヴィッドソンはクーンやファイアーベントの著作のうちに跡付ける。ところがこの二元論にはなんら根拠がない。デイヴィッドソン曰く「それは経験主

義のドグマ、第三のドグマである。⁽²⁰⁾」

4. 経験と真理

概念相対主義において暗黙の内に前提とされているこの二元論が何故ドグマであると看做されるのかを理解するために、概念相対主義において言語と経験的内容がどのような関係にあるのかが明らかにされねばならない。そのためにデイヴィッドソンはその関係についての考えを次の二つに大別する。一方は概念図式(言語)が経験を整頓する(organize)(体系化する(systematize)、細分化する(divide up))という考えであり、他方は概念図式(言語)が経験に一致する(fit)(予言する(predict)、説明する(account for)、直面する(face))という考えである⁽²¹⁾。またそのように整頓されたり、予言されたりする側の存在者についての捉え方も次の二通りに大別できよう。一方で実在—物理的な世界もしくは自然—であると、もう一方では経験—直接経験—と捉えることができる⁽²²⁾。

まず、経験的内容についての捉え方はどちらが適切であるか。通常、一つきりの対象を整頓するとは言わない。ゆえに整頓されるものはなんらかの構成要素の複合体と考えられる。ところで、ある言語の述語と同じ外延を持つような述語を他の言語中に見いだすことができない場合があるが、それが特例と考えられるのは、それ以外の部分で翻訳が成功しており、どちらの言語にも共通する存在論が確立している場合である。けれども我々が問題にしているのは翻訳可能性の完全な失敗である。翻訳可能性が完全に失敗しているならば共通した存在論を前提にすることは不可能である。ゆえに、何らかの存在論すなわち個体化の手段を手中に収める以前には指定することができない物理的对象によって構成される実在を、一つのあるいは複数の異なる概念図式によって整頓されるものとして捉えることは、翻訳可能性の完全な失敗を有意味に主張するためには不適切であろう。⁽²³⁾

ところが、経験についても同様のことがいえる。整頓するもしくは組織化する

といえるように複数性を確保するにはやはりなんらかの個別化の手段が前提となる。けれどもそのような個別化の方法を採る言語は我々の言語に非常に似たものであるに違いない。⁽²⁴⁾

また言語が組織化するのには直接経験であると捉えたところで問題となるのは、直接経験を組織化するだけの言語ははたして言語として十分な資格を備えているだろうかということである。物理的対象について語ることが我々の日常の言語にとって必須の部分の占めているのは否定できない事実である。⁽²⁵⁾

けれども、言語が経験を組織化するもしくは整頓すると捉えるのではなく、言語が経験に一致すると捉えるならば、これらの問題は解消されることになる。すくなくともカルナップ流の合理的再構成をおこなうならば、言語が物理的対象への指示などの言語的相貌をそこなうことなく直接経験と一致しているか否かを判定するのは可能である。ところで、証拠と付き合わせたり、予言をしたりするのは文であるから、組織化から一致へと経験と概念図式との間の関係についての捉え方が変わると共に、我々の関心も述語、変項、量子子、単称名辞などの言語の指示的装置についてから文へと移ることになる⁽²⁶⁾。加えていうならばクワインによる還元主義への批判を踏まえたならば、経験の裁きを受けるのは単一の文ではなく、束になった複数の文である。このことはすなわち、概念図式が経験と一致するという見方をとるならば、指示の問題から真理の問題へと関心が推移するということである。

では、概念図式が経験と一致するとはどのようなことか。理論中の全ての文は直接経験を報告する文に還元されねばならないとする狭義の還元主義に限らず、経験と一致するという考え一般はその基礎の部分に、文を受け入れるための証拠は全て経験によって供給されるという主張を前提としているとデイヴィッドソンは指摘する。⁽²⁷⁾ その主張は究極的には、全体としての理論が真であるためには可能な感覺的証拠の総体と一致していなければならないという主張である。けれども、ここでデイヴィッドソンが問題とするのは、経験との一致という発想によっては、真であることの素朴な概念になんらつけ加えるところがないということ

ある。証拠や事実についてではなく感覚的経験について語ることは、なるほど証拠の源泉や本性についての一つの視点を提示しはするが、理論が真であることを述べるためには、感覚的経験について語ることが要求されるということはない。なぜなら文が真であることについての述べかたとして、たとえば『雪は白い』は雪は白いきかつその時に限り真である」というトリビアルに真であるような文がある。けれどもこの文はなんら感覚的経験への言及も、それどころかなんらの事実への言及なしでそれ自体でなりたっている。(28)

ところが何らかの存在者と一致するものとして言語や概念図式を考えた場合、「一致する」ということから理解できることは、ある理論を受け入れることができるのはその理論が真であるとき、という以上のものではない(29)。けれどもこのことは翻訳可能性の完全な失敗を理解するためには何の助けにもならない。なぜなら単に概念図式が経験と一致するという考えから概念図式について理解できたことは、概念図式を受け入れることができるのはそれが真であるときということである。それに従えば、複数の概念図式が異なる人々によって受け入れられている状況では、それらが互いに共約不可能であると主張することは、それらの概念図式はおおかた真であるが翻訳できないと主張することとなる。けれども以下で論じる意味と信念との相互依存においてみられるように、真理概念と翻訳ともまた切り離して考えるのは困難である。(30)

「意味の固定された蓄積であろうと、理論に中立的な現実であろうと、どちらも概念図式を比較する根拠を与えることはできない。根拠ということで、複数の共約不可能な図式に共通した何かということの意味するのであれば、そうした根拠をさらに追い求めることは間違ったものとなる。

(31)」

以上までに概念図式(言語)と経験的内容との間の関係を説明するそれぞれに二種類の考えを考察した結果、そのどれも翻訳可能性の完全な失敗を理解する助けにはならないことが明らかとなった。

我々が問題にしてきたのは概念相対主義であった。概念相対主義によれば、真

理は概念図式に相対的であり、概念図式を超えた客観的な真理は存在しないとされる。概念図式が異なることの基準として翻訳可能性の失敗が考えられたのであるが、翻訳可能性の完全な失敗を理解可能になるように概念図式を定式化することはできなかった。では残る翻訳可能性の部分的な失敗についてはどうか。

ここで問題となるのが意味と信念の相互依存の関係である。それは発話行動を解釈する際の二側面、すなわち発話者へ何らかの信念を帰属させることと発話された文を解釈することの二側面から生じる関係である。我々が他者の発話行動を解釈するためにはその発話者が信じていることについて十分知っていなければならず、かつ、その発話内容を理解することなしにその発話者が信じていることについての知識は得られない。我々はこの関係を前提として、信念の枠組みである概念図式と、言語の翻訳可能性とを結びつけたのであるが、ある発話者が我々とは全く異なる概念図式を持っているとは何をもって判断されるのか。問題としているのは翻訳可能性の部分的な失敗の場合であるから、翻訳に成功した部分に言及することで、翻訳可能性の完全な失敗を考察した際に陥った困難を避けることが出来るかもしれない。⁽³²⁾

そもそも翻訳の成功は何に基づいているのだろうか。翻訳の成功が最小限であろう状況として我々と全く異なる言語（仮に原地語と呼ぶ）を翻訳する場合を考えることが出来る。これをデイヴィッドソンは根底的解釈と呼んでいるが、翻訳の出発点となるのは、文へのある一般的な態度、具体的に言うならば同意を表わす文（一語文も含む）であるなり同意を表わす身ぶりである。同意とはすなわち問われた文が真であると受け入れる態度に他ならない。我々の翻訳者が原地語で何か問い、それに対して原地語の話者が同意で答えた場合、我々の翻訳者は自らも真であると受け入れるような翻訳をその原地語の文に与えるであろう。このことはすでに翻訳者と原地語の話者の間でなんらかの共通の理解を得ていることを前提としている。さらには善意（charity）が重要な問題となってくる。好むと好まざるとに関わらず、他者を理解するためには、ほとんどの場合他者が正しいことを前提としなければならない。さもなくば翻訳の作業を有効に進めることは出

来なくなってしまう。(33)

では、こうした状況にあって我々は何を根拠に、その現地語の話者が我々と異なる概念図式を持っていると判定できるのだろうか。翻訳可能性の部分的な失敗として、我々が強固に真であると信じているような文に翻訳される文が現地語の話者によって拒絶されたような場合、我々は図式が異なっていると結論づけたいかなるかもしれない。けれどもそれが図式を異にしてのものなのか、それとも単に信念の違いなのか、どちらであると判定する一般的原理は存在しないのである(34)。その理由は意味と信念の相互依存の関係を鑑みれば明らかであろう。

かくして概念相対主義は、翻訳可能性の完全な失敗によっても翻訳可能性の部分的な失敗によっても理解できるようなものとはなりえなかった。デイヴィッドソンは概念図式と経験的内容という二元論がそもそもの問題であるとして、経験主義とよばれるものからの離反を表明する。(35)

5. 証拠の理論としての経験主義

デイヴィッドソンの議論はクワインによる経験主義批判を継承したものであり、その上で、概念図式と経験的内容という二元論もまた経験主義のドグマであり、その最後のドグマを取り払った後には経験主義と呼べるようなものが残されることはないと言った経験主義からの離脱を結論していた。そこでいわれた図式／内容の二元論への批判はクワインによる分析／総合の二分法への批判を拡張したものであった。ところがこれに対しクワインは、デイヴィッドソンの上述の議論へのコメントである「いわゆる第三のドグマについて」において、デイヴィッドソンのように経験主義そのものを放棄することはせず、経験主義は真理の理論としては全くの失敗であるが、保証された信念の基盤としての証拠の理論としては我々に残されているとして、経験主義的認識論の延命をはかる。(36)

では、保証された信念の基盤としての証拠の理論とはどのようなものであるか。クワインは、デイヴィッドソンの指摘した第三のドグマとされるものは、真

理とではなく保証された信念との関係において捉えるならばドグマでないどころか、いまだ有効であると主張した。クワインは、デイヴィッドソンが「経験の総体」「感覚面の刺激」と「事実」「世界」とを区別せずに言及していることから真理と信念を混同しているのではないかと指摘する。真理に関してはタルスキの規約Tが最良の説明を与えているがゆえ図式と経験の二元論は不必要であることについてはクワインは同意する。けれども経験主義が問題にする経験の総体というものは真理の基礎としてあるのではなく、保証された信念 (warranted belief) の基盤となるものであり、真理概念との関係のみから判断して、経験の総体と概念図式という二元論をドグマであると退けるわけには行かない。経験主義のそうした側面について気付くことなくデイヴィッドソンは経験主義を退けてしまったのではないかとクワインは懸念する。⁽³⁷⁾

概念図式という言葉を媒介にデイヴィッドソンは概念相対主義とクワインとを結びつけていた。けれども概念図式という言い回しに関してクワイン自身「言語と言い換えてもよかった」⁽³⁸⁾と述べているように、概念図式の問題をクワインに即して考察するならば言語もしくは理論の問題として捉えることが適切である。その上で経験主義を擁護するクワインの上記の議論を理解するためには、二つのことが明らかにされねばならない、一つは保証された信念とは何であるのか。それは真理概念とどのように異なるのか。もう一つはそうした保証された信念の総体である理論にとって十分な証拠とはどのようなものであるのか。それははたして感覚的経験から得られるのだろうか。

まず後者についてクワインがどのように捉えていたか調べてみよう。感覚的経験と物理学のような科学理論との間にはいくつかの越えるべき溝がある。経験主義を正当に主張するためにはなによりもこうした溝を埋めることから始めなくてはならない。その一つの試みとしてあったのが還元主義であり現象主義であった。ところが我々の日常的語り方である物理的対象について語る言語は感覚的経験のみを表現する言語へと完全には還元できないという難点を還元主義は抱えていた⁽³⁹⁾。経験主義を保持しようとするならば、そうした難点を退けなければなら

ないだろう。

クワインは『ことばと対象』において言語と感覚的刺激についての次のようなモデルを提示していた。まずクワインは言語中の文を次の二種類に大別する。一つは状況に応じて真理値が変化する文であり場面文 (occasion sentence) と呼ばれる、もう一つは「酸化銅は緑色である」といった真理値が常に変わらない文であり永久文 (eternal sentence) と呼ばれる。(40)

その上でクワインは刺激意味 (stimulus meaning) という概念を導入する。それは次のように定義される。ある話者になんらかの感覚的刺激が存在する状況で、その話者に対し一語文を含む何らかの文を尋ねる。もしその話者が同意をもって答えるならば、その刺激がその文の肯定的刺激意味であり、不同意であるならば否定的刺激意味であると考えることが出来る。この肯定・否定の両方の刺激意味の対が刺激意味である。刺激意味の観点から場面文 (occasion sentence) を定義し直せば、同意不同意を促すような適切な刺激を伴って問われた場合にのみ同意または不同意を強要する文である、となる。また場面文と対照的に、定常文 (standing sentence) は、そのような刺激が伴っていないくても刺激が伴っていた場合と同じように同意もしくは不同意が得られる文と定義される(41)。また、問われた時刻や人が変わっても全く真理値を変えない定常文は永久文と呼ばれる(42)。さらに個人において異なるような付帯的情報の影響を受けても刺激意味が全く変化しない場面文が、観察文 (observation sentence) とされる(43)。クワインがこのような定義を行った目的は、意味という抽象的なものにたよることなく、また観念やセンスデータといったものに頼ることなく、言語と非言語的刺激とを間主観的に観察可能な仕方結びつけることであった(44)。

これによってクワインはまず感覚的経験と言語一般との間隙を埋めることに成功したと言ってよい。これらの定義によって、文の有意性を刺激との関係において確保していると同時に、センスデータ言語といった感覚的言語を基礎としていないので、還元の問題も回避されている。また上記の観察文の定義は、理論語が含まれていないことといったことを観察文であることの前提としていないので、

そうした理論語が理論と観察を結びつけていると考えることも可能となる⁽⁴⁵⁾。

次に観察と理論との間のギャップがある。これについてクワインは「経験的内容」という題の短い論文で論じていた⁽⁴⁶⁾。上記のモデルに基づけば、観察文は場面文であるのに対し、科学理論は永久文によって構成されているという違いがある。加えて、科学理論は永久化された（すなわち真偽を固定された）観察文を直接に含意するのではなく、観察条件文（observation conditional）を含意するのみである。観察条件文とは「もしAならばB」でAが初期条件を表わし、Bが永久化された観察文を表わしている条件法の文である。さらにはその前件と後件が時間と場所に関して一般化された観察条件文は観察定言（observation categorical）と呼ばれる。理論定式化（theory formulation）が含意するのはこうした観察定言である⁽⁴⁷⁾。

けれども、こうした観察定言が真であるということを我々はいつ知ることが出来るのだろうか。観察定言は時間と場所に関して一般化されているため、決して観察によっては真であることは知ることが出来ないと言っているクワインはいう。けれども観察は観察定言を偽とすることは出来る⁽⁴⁸⁾。なるほど、観察は観察定言を決して真とすることは無いのだが、

「観察が観察定言に例外なく一致し続けるにつれ、我々はその観察定言への確信を強めていく。それは単純に習慣形成あるいは条件づけである。」

⁽⁴⁹⁾

理論の経験的内容とはこの観察定言であるとクワインは言う。なぜなら観察と理論とを結びつけているのは観察定言だけだからである。

続けてクワインは次のような問題を提起している。もし二つの理論定式化が全て同じ観察定言を導出するならばその二つは経験的に等価である。かつその二つが論理的には両立しないことがありうる。ではその二つのうちどちらが真なる理論定式化と言えるのだろうか。どちらも真であるとクワインはいう。

「ものと理論におけるその位置」においてクワインは次のように述べている。

「実際科学は間違ふことがありうる。それは予言された観察が失敗したと

いう正にお馴染みの仕方です。けれども、幸福かつ未知のことながら、過去及び未来のあらゆる可能な観察に適合するような理論を、もし我々が獲得していたとしたら？その場合、世界が理論の述べることから逸脱していると、どういった意味で言われうるか？明らかにそれは意味を為さない。たとえ『あらゆる可能な観察』という句をどうにか理解できるような場合であっても。我々の科学理論の全体が世界に要求することは、我々が理論から予期した刺激の連続を確信させるように構成されよ、ということだけである。⁽⁵⁰⁾」

この発言は物自体 (Ding an sich) を追い求めるような超越論的な知識論を批判してのものであるが、このことからクワインが、間違ふことのない真なる知識の体系として科学理論を捉えるのではなく、その時点までにある程度の保証を得られた信念の体系として科学理論を捉えていることが明らかである。

これによって、もう一つの問題すなわち保証された信念と真理概念との相違についても答えが得られたといえよう。保証された信念は真であると確立されたわけではない。けれどもそれらは習慣形成と同じようにして、広く我々に確からしいものとして受け入れられているものである。

6. 概念相対主義と経験主義

以上のことからデイヴィッドソンが問題にした概念相対主義とクワインの経験主義との関係も理解することができるだろう。デイヴィッドソンは凶式と経験との二元論こそが概念相対主義の温床であり、経験主義の最後のドグマとして破棄すべきことを主張していたのに対し、クワインはあくまで、我々の理論の総体を確証を与えられた信念の総体として捉え、その基盤となる経験を重要視した。「経験的内容」においては「文化相対主義という亡霊」⁽⁵¹⁾と呼び、「自然化された認識論」においてもハンソンの相対主義を批判しており⁽⁵²⁾、クワインは一貫してデイヴィッドソンが呼ぶところの概念相対主義に否定的であった。よって「概念

図式という考えそのものについて」でのデイヴィッドソンの議論は、クワイン自身否定するものにクワインが肩入れしていることを指摘することで成り立っている批判といえよう。ゆえに、問題となるは概念相対主義の源泉であるとデイヴィッドソンが指摘した概念図式／経験の二元論を保持しつつ、クワインはどのようにして相対主義から逃れることができるのかということである。

「いわゆる第三のドグマについて」においてクワインは真理の理論としての経験主義は役に立たないとデイヴィッドソンに譲歩しており⁽⁵³⁾、その点でデイヴィッドソンの批判は正当なものであると評価しているといえよう。それゆえ真理概念と概念図式の関わりを根拠として主張される概念相対主義にクワインが与しないことは明らかである。

残る問題は、分析的／総合的の二分法を破棄してもなお、その拡張されたものとデイヴィッドソンが指摘する概念図式／経験の二分法を保持することは可能であるのかということである。これに関しクワインはこれまでに見てきたように、刺激と観察という概念を用いれば真理概念とは別の観点からも理論にとっての経験的内容は有意味に理解できるものと主張していたのである。

だが、何故それがデイヴィッドソンの指摘するようにはドグマではない、と言えるのか。そこには、我々がすでに手にしている科学理論の蓄積とその改訂可能性をどのように説明するか、という問題が関わってくる。デイヴィッドソンのように経験主義からの離反をクワインが選択することができないのは、理論が改訂されるのはどのような状況においてか、という問題を避けて通るわけにはゆかないからである。理論の改訂が行われるのは予言された観察が失敗した場合であり、それ以外は考えられない。よって観察とその源泉である広い意味での経験を無視するわけにはいかないのであり、それゆえ概念図式／経験という二元論をドグマであると破棄することはできないのである。はからずもデイヴィッドソンはこう指摘していた「証拠やあるいは単に事実についてではなく、感覚経験について語ることは、証拠の源泉や本性についての一つの観点を提示しはする。だが、それによっては、概念図式が照らし合わされるべき宇宙に何らかの存在者を

付け加えることにはならない。⁽⁵⁴⁾まさにクワインが問題としたのは、その「証拠の源泉や本性」なのである。

ではクワインは何故経験主義に固執したのか。それに関して、経験主義を支持する議論を、また別の観点から、クワインが行っている箇所がある。1975年の論文「自然的知識の本性」において、「外的世界についての我々の唯一の情報源は我々の感覚面への光線や分子の衝突であるということを科学が述べている⁽⁵⁵⁾」と、経験主義を擁護していた。

けれどもこの一文から明らかとなるのはクワインの自然主義への傾斜である。ここにいてクワインの経験主義における自然主義的性格が明確なものとなったと理解できよう。あるいはこう言えるかもしれない、クワインは自然主義に与した後も経験主義者であった、と。

7. 経験主義と自然主義

デイヴィッドソンが概念図式と経験の総体という二元論をドグマであるとして退けたのにたいし、クワインはあくまで経験主義を擁護しつづけた。経験主義とは我々にとって得ることの出来る証拠の全ては感覚的経験から得られると主張する立場である。「経験主義の五つの里程碑」⁽⁵⁶⁾において、自らの認識論的な探究の到達点である自然主義を経験主義の発展のうちに位置づけていたことも、経験主義を保持しようとする態度の表れであろう。

クワインは「経験主義のふたつのドグマ」において、日常的な常識から純粹数学までにおよぶ総体としての科学を「その縁においてのみ経験と触れ合うような人工の織物 (man-made fabric) ⁽⁵⁷⁾」と比喩的に表現していた。それをうけて「いわゆる第三のドグマについて」では、次のようにして経験主義を特徴づけている。先の比喩的表現中の織物とは、たとえ一時的にせよ真であると科学において受け入れられた文の織り合わされたものである。またその縁には、それが真であると受け入れる際にはあるパターン感覚受容器の発火を常に伴うような場面文

がある。

ドグマなき経験主義はクワイン自身の言葉でもって以上のような説明を与えられた。それには次のような特徴がある。一つは、全体論的知識論という性格を持つこと。もう一つは自然主義である。デイヴィッドソンの批判とクワインのそれへの応答から判ったことは、クワインにおける経験主義は自然主義的な擁護なしには成立し得ないということである。すなわち、認識論の自然化についての当否は別としても、二つのドグマを取り払った後の経験主義は、あくまで経験主義と呼ぶべきものであろうとするならば、自然主義的傾向は不可避のものとなるのである。

かくしてクワインにおける経験主義と自然主義との連関が明らかになった。まず確認できることは、クワイン流の自然主義は、現在の自然科学の知識を用いることを是とするものであり、それゆえ客観的な真理を否定するような極端な概念相対主義とは距離をおくものであるということである。

われわれを混乱させるのは、改訂可能性を重要視する、すなわち科学は誤りうると看做すクワインの態度が一見相対主義的真理論と調和するように思われることである。また一方、こうした「科学は誤りうる」という態度は、認識論は自然科学の一分野である心理学に取って替わられるとする、クワイン流の認識論の自然化の主張と齟齬をきたすのではないか、という懸念が生じる。

実の所、これら二つの問題は、天秤の両端を形成しているのである。すなわち、一方の極には形而上学的に基礎づけられた不変の真理が、もう一方の極には極端な相対主義に基づく客観的な真理の否定が存するような天秤である。自然主義と全体論をその骨子とするクワイン流のドグマなき経験主義は、それらの中庸を行くものと看做すことが出来よう。中間点であるが故、両極のせめぎ合いの渦中にあり、それゆえ誤解ないしは混乱を生むものであるが、これまでに見たようにそれら誤解の種を解消すれば、ドグマなき経験主義はきわめて説得力をもつように思われる。

注

- (1) Davidson "On the Very Idea of Conceptual Scheme" in *Inquiries in Truth and Interpretation*.
- (2) Quine "On the Very Idea of a Third Dogma" in *Theories and Things*. [邦訳:「いわゆる第三のドグマについて」高頭直樹訳 『現代思想』 vol.16-8 所収]
- (3) Davidson *op. cit.*, p.183.
- (4) *ibid.*, p.189.
- (5) *ibid.*, p.198.
- (6) *ibid.*, p.183.
- (7) Kuhn *The Structure of Scientific Revolutions* p.94 [邦訳『科学革命の構造』中川茂訳 p.106] 「対立する政治制度の間の選択と同じく、対立するパラダイムの間の選択は、共同生活の両立しない流儀の間の選択である。このような性格を持つゆえ、その選択は、単に通常科学に特徴的な評価の手順によっては決められておらず、また決めることはできない。なんとすれば、その評価の手順は部分的に特定のパラダイムに依存しており、そのパラダイム自体が今問題になっているのだからである。」
- (8) Davidson *op. cit.*, p.183.
- (9) *ibid.*, p.184.
- (10) *ibid.*, p.184.
- (11) *ibid.*, p.185.
- (12) *ibid.*, p.185-186.
- (13) *ibid.*, p.186.
- (14) *ibid.*, p.186.
- (15) *ibid.*, p.187.
- (16) *ibid.*, p.187.
- (17) *ibid.*, p.187.
- (18) *ibid.*, p.187.
- (19) *ibid.*, p.189.
- (20) *ibid.*, p.189.
- (21) *ibid.*, p.191.
- (22) *ibid.*, p.192.
- (23) *ibid.*, p.192.
- (24) *ibid.*, p.192.
- (25) *ibid.*, p.192.
- (26) *ibid.*, p.193.
- (27) *ibid.*, p.193.
- (28) *ibid.*, p.193-194. この方法を一般化したのがタルスキによる規約Tであり、それは、言

語Lにとって十分なだけの真理についての理論は、Lのあらゆる文sについて、「sが真であるのは、pであるときかつその時に限る」という公理を導出しなければならないというものであるが、これは真理概念の用いられ方についての我々の直観を的確に表している。

(29) *ibid.*, p.194.

(30) *ibid.*, p.194.

(31) *ibid.*, p.195.

(32) *ibid.*, p.195.

(33) *ibid.*, p.195-196.

(34) *ibid.*, p.197.

(35) *ibid.*, p.198.

(36) *Quine Theories and Things* p.39.

(37) これに続けてクワインは現象主義の立場を退けることを明言している (*Quine Theories and Things*, p.40.)。感覚面の刺激や経験の総体は事実や世界とは区別して捉えられるべきであり、かつそれは経験主義にとって重要なものであると主張することは一見現象主義に与するものに思われよう。けれども経験主義を、我々に与えられる証拠の全ては感覚的証拠であると主張する立場であると証拠の面から捉え直した場合でも、あくまでクワインは物(外的事物)について語る我々の語り方を基礎的なものと看做し、現象主義になんらの優越性も認めていない。

(38) *ibid.*, p. 41.

(39) Quine "Two Dogmas of Empiricism" in *From a Logical point of View* p.20-46.

(40) *Quine Word and Object* p.9-13.

(41) *ibid.*, p.32-33, p.35-36.

(42) *ibid.*, p.191-195.

(43) *ibid.*, p.42.

(44) こうした刺激と刺激意味との関係に関して、あくまで体表面での刺激に優位をおく「近位説」と観察を共有できる物的対象と刺激を同一視する「遠位説」という二つの解釈が可能であるという問題が指摘されている [富田恭彦『クワインと現代アメリカ哲学』なお富田のその議論はデイヴィッドソンを受け継いだものである。]

(45) *Quine Theories and Things* p.25-26.

(46) Quine "Empirical Content" in *Theories and Things* p.24-30. [邦訳:「経験的内容」森田茂行訳『現代思想』vol.16-8 所収]

(47) *ibid.*, p.26-28.

(48) これは、ポパーの言う「反証可能性 (falsifiability)」と類比的である。

(49) *ibid.*, p.28. クワインのこの言葉から思いだされるのは因果性についてのヒュームの議論である。ヒュームの懐疑論とクワインの経験主義との関係は、別の機会に自然主義との関連で論じることしたい。

- (50) Quine *Theories and Things* p.22. またこの問題に関してクワインは "On Empirically Equivalent Systems of the World" *Erkenntnis* 9 においても論じている。
- (51) *ibid.*, p.29.
- (52) Quine "Epistemology Naturalized" in *Ontological Relativity* p.88.
- (53) Quine *Theories and Things* p.39.
- (54) Davidson *op. cit.*, p.194.
- (55) Quine "The Nature of Natural Knowledge" in Guttenplan(ed.), *Mind and Language*, p.68.
- (56) Quine "Five Milestones of Empiricism" in *Theories and Things* p.67-72.
- (57) Quine *From a Logical Point of View* p.42.